

# OUMC

## コロナ下の山行にはリスクも 事前にワクチン接種を

副会長 山田 靖則

昨年の年明け以降、国内で感染が拡大した新型コロナウイルスは第一波が収束し始める時期と本格的登山シーズンの開始時期が重なり、日本山岳・スポーツクライミング協会、日本山岳ガイド協会、日本登山医学会などが山行時の感染予防策（ガイドライン）や山小屋向けの対策を公表した。多くの登山者や山小屋は



このガイドラインに従っていると思われる、幸い、これまで当会会員

の山行では感染事例はなく、マスコミ報道でも登山中の感染に関する情報は見られない。

しかし、万一、倦怠感、発熱や味覚障害といった症状がない状態で入山し、現地で感染や感染の疑いが生じた場合の対処法についても考える必要がある。これまでの山の遭難対策は、天候急変も含め、危険予知の

ための教育・訓練で回避できるとされてきた。万が一の場合も所属団体の救援隊、各県の山岳救助隊によって対応していた。しかし、新型コロナウイルスに対しては、これまでとは異なるマネジメントが必要であろう。

入山まではガイドラインを遵守し、各人が日常的に健康管理を行うのが最低限の必要事項であろう。しかし、不幸にも現地で感染あるいは感染の疑いが生じた場合（これも現地に医者がいるわけではないので自己判断となる）の対処はどうすべきであろうか。

第一に考えられるのは自力による下山であるが、本人だけでなく同行メンバーに対する防護策（マスク、手袋、防護服）や下山後の現地保健所や医療機関への対処法も考えねばならない。

歩行が困難な場合はさらに問題が大きくなる。山小屋に救援を依頼しても、山小屋は宿泊者が感染した場合の対策は講じていても、宿泊者で

ない感染者やその同行者に対しての対応は難しいのではないかと。山岳救助隊に依頼するにしても、長野県などによれば救助隊の対応は普通の事故に比べて遅れるようだ。

長野県警山岳救助隊の訓練ビデオでは、救援時も感染者へのマスク、手袋、感染防止コート等の処置を施した後、防護服等を装着した隊員による救出となるようだ。気温の高い時期は感染者も救助者も大変な状況になると思われる。また、緊急事態の場合のヘリコプターの使用も受け入れ先の医療機関がなければ意味がない。

問題点だけを羅列すると、各県や諸機関が言っているように山行自粛という結論になりそうであるが、われわれの山行意欲とどう折り合わせるかが必要となる。

幸い、ワクチン接種が本格化し、職域接種も開始された。山行の条件として事前のワクチン接種（できれば2回）が現時点で考えられる有効な方策であろう。山行を行いたければ、2回接種後の抗体生成までの期間を考え、できるだけ早く接種することを考えるべきである。

また、当会としても、現役山岳部の活動を含め、万一の事態に対してどのような対応、対策ができるのかを詰める必要があると思われる。

コロナ禍が収束し、以前のような自由闊達な山行ができることを希望

してやまない。

## 冬と春の合宿に成果

### コロナ感染防止策は徹底

副会長 石原 敏雄

OUMC創立75周年の記念行事に海外登山の準備を開始しようとしていた矢先、新型コロナ禍に見舞われました。そして、準備期間中に若手OBの人材確保、スポーツクライミング主体の活動を続ける現役部員の活動にアルパイン登山の復活なども図りたいという目論見は頓挫してしまいました。

それでも関東1都3県に2回目の緊急事態宣言が出される直前の去年末、60代直前から60代半ばの会員を中心に7名が参加して、入山の容易な上高地の小梨平にベースを設けた冬合宿を実施できました。わずかの晴れ間をうまく利用できたという幸運に恵まれ、新雪ラッセルにしごかれながら西穂山荘前までアタックテントを上げて吹雪の西穂独標アタックや、翌日は焼岳アタックを敢行するなどの成果を果たせました。もちろん、冬合宿実施の可否については若干の葛藤が山岳会の中でも

利用はできるだけ避けて車で登山口に向かうなど、コロナ感染防止策を徹底していただきました。

ありましたが、参加者にはマスクの着用や手洗いなど日常的な感染防止対策はもちろんのこと、参加に当たっては2週間前から発熱や風邪の症状がないことや、公共交通機関の

また、コロナ禍でほとんどの山小屋が休業になった今年の春山シーズンを中心に1泊2日、または2泊3日程度のテント泊で頂上アタックをめざす個人山行がいくつか企画され、無事に山行を終えました。このような登山活動が若手OBや現役部員の間にも浸透・拡大しながら継続して冒頭に掲げた75周年記念行事が達成されることを願っています。

## 現役の活動は中止相次ぐ

山岳部長 奥山 宏臣

昨年度の現役の活動は4月の新人勧誘クラブオリエンテーション、5月の新人歓迎合宿(穂高・岳沢)、夏山合宿などを予定しましたが、新型コロナウイルス感染症のため、すべて中止となりました。大学の活動基準で講義はほとんどがオンラインとなり、課外活動の制限も厳しく、宿泊を伴う合宿は年間を通して禁止されました。体育館も閉鎖されたのでクライミングウォールも使用できず、個々の部員の自主練習という形を取らざるを得ない1年間となりました。

そんななか、今年4月6日に新年度の活動方針を相談するため、前・現リーダーらに集まってもらいました。とりあえず4月はサークルオリエンテーションでの新入生勧誘、5月は北アルプスでの新人歓迎山行などを予定しましたが、残念ながら5月山行は緊急事態宣言発令のため中止となりました。ワクチン接種が遅々として進まない状況下では先の見通しは立ちませんが、できれば夏ごろには縦走や沢登りを企画して基本的な登山技術を学ぶところから部

活動を再開するつもりです

個人的には昨年12月19、20日にあった国立登山研修所主催の安全登山オンラインセミナーに参加しました。運動生理学、医学、積雪と雪崩、気象など、2日間にわたる充実した内容で、これから積雪期登山をめざす現役部員にとってはちょうど良い内容と思えました。5月には夏山向けのセミナーもありますので、現役部員の皆さんにも声をかけようと思います。

このように昨年4月以降、山岳部としての活動はほとんどできていません。ただ、そんな中でも5人の新入部員を迎えることができたのは何より明るい話題です。今年こそ部員みんなで思う存分、クライミングウォールや山に向き合える日が来ることを楽しみにしたいと思います。

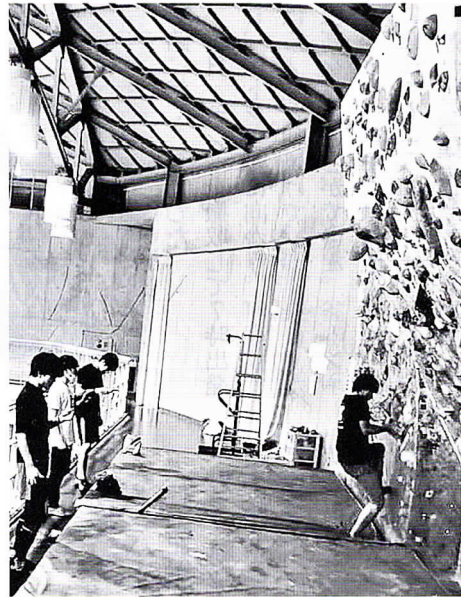
## 2021年度の抱負

山岳部主将 大澤 駆

阪大山岳部では今年度、3つのことに注力して活動していきたいと思っています。

1つ目は新入生の勧誘です。部活動は4月初めからできましたが、数週間だけで、新入生の勧誘はほぼできない状態でした。活動が再開できるようにになったら、まず新入生の勧

誘を始めたいと思っています。具体的には、ボルダリング体験会は週に2回程度設けて、参加者の把握と人数の調整をしてコロナ対策を心がけ



阪大ウォール

教えていただくことを考えています。今後、感染状況がどうなるかわかりませんが、活動が再開できたら3つのことに努め、活動ができないときは特に2つ目のモチベーションの向上に注力していきます。

（理学部3年生）

ながら実施していきたいと考えています。新人歓迎登山は活動を再開した時の大学の活動基準に合わせて行おうと思っています。

2つ目は、部のモチベーションの向上と維持です。去年から部としての活動ができなかったり、再開した中で、部全体、特に新入生のモチベーションを向上させていきたいと思っています。具体的には、活動が再開できたときに部内でコンペを実施したり、山行を計画したりなどを考えています。

3つ目は、登山の技術や知識を持っていてる人を増やし、継承させて

いくことです。これは登山活動を活発にしていくなにも必要だと思っています。具体的には部の幹部を中心にセミナー等への参加やOBから

山岳部前主将 大田 溪介

### コロナ禍で活動に制約

2020年度はコロナウイルスのせいで部員がそろって活動することはなかなかできませんでした。夏ごろから屋外での活動を徐々に始め、10月からは阪大ウォールでの活動が制限を設けながらできるようにになりました。コロナという新たな生活様式に合わせるは大変でしたが、部員が集まって活動できるようにしたのはよかったです。

登山の方は新人歓迎山行で生駒山と六甲山・掬星台に行きました。掬星台は中之島山岳部と合同でした。ただ、大学の活動基準で大阪府外に出るのは制限されたり、雨で中止になったりと、あまり活動できなかったため、今年は頑張りたいです。

6月にはサークルオリエンテーションもありましたが、新人勧誘自体は9月ごろから始め、5人入部してくれました。5人とも活動にも積極的で、ボルダリングと登山の両方に興味がある部員もいます。

ただ、今年1月にまた緊急事態宣言が発令され、部活動自体ができなくなりました。去年1年で阪大ウォールを含めて活動できたのは半年ほどで、部員間の交流の場をなかなかつくれませんでした。今年に入っても十分な活動はできていないので、もっとも部員間の交流を大切にしていきたいです。

（工学部4年生）

### 冬の西穂高と焼岳

山崎 優太

【期間】12月26日～30日

【メンバー】石原敏雄、上松一雄、科野昌藏、草尾寛、畑秀信、大西啓之、山崎優太

【行程】沢渡―小梨平―西穂山荘―西穂独標―小梨平―釜トンネル―中の湯―焼岳―中の湯―沢渡

#### 【行動記録】

26日 沢渡に集合し、タクシーで釜トンネルへ。13時ごろ、小梨平着。設営後、翌日の取り付き偵察のため1,550m付近まで登った。

27日 7時40分出発。西穂山荘で合流予定の草尾さんに携帯で出発を伝える。前日の偵察地点までは問題なく進んだが、1,600mを越えたあたりから急登となり、ラッセルが必要となった。正午ごろ1,950mピークに到着。14時ごろ2,100mを越え、傾斜が緩くなる。ここで幕営も考えたが、2,200m付近で休憩中に草尾さんに電話が通じたため、山荘から下りてきてトレースをつけてもらう作戦に出た。2,270mの急登山前で草尾さんと合流し、16時30分、西穂山荘にどり着いた。

28日 7時出発。山荘やテントに宿泊していた登山者が数パーティーいたが、トレースはなし。天候は曇りで、たまに独標がのぞく程度。独標直下の鎖場は後半、雪壁となっていたため、ピッケルを使って登った。山頂で写真を撮り、早々に下る。急な下りが心配だったが、ピッケル、アイゼンがよく利き、すんなり下り

ることができた。西穂山荘でテントを撤収し、小梨平まで下りる。29、30日は大滝槍見台に行く予定だったが、30日からは荒れそうだとこの予報だったので、29日に焼岳、30日には



西穂高独標で

で登ると、西側からの風が強くなったので、ストックからピッケルに持ち替える。途中1カ所、岩場があったが、問題なくクリアした。山頂は360度の展望で、特に槍ヶ穂高がきれいに見える。前日登った独標も見えた。下山を始めて1時間も経たないうちに雪が降りだったので、本当に滑り込みの登頂だった。りんどう平での休憩を挟み、2ピッチで中の湯まで下山した。

30日 朝から雪。バスを乗り継ぎ、沢渡へ戻る。  
(2020年基礎工学部修士卒)

## 初冬の鳳凰三山

大西 啓之

【期間】 11月22日～23日

【メンバー】 石原敏雄、大西啓之

【行動記録】

22日 御座石鉱泉↓西の平↓燕頭山↓鳳凰小屋

海外登山研究会の話聞いて参加するべく5月の合宿を期待していましたが、コロナの影響で活動ができない状態でした。それでも年末山行はやれそうということで、シユラフ、ヤッケなどの装備も新たにそろえました。そして、年末に向けて経験を積むべく、大先輩の石原さんに同行をお願いし、久しぶりの雪山に鳳凰

三山を選びました。

石原さんを車で出迎えて中央道を走り、甲府盆地に出ると、鳳凰三山が見えてきますが、ほとんど雪がありません。あまりの雪の少なさがびっくりでしたが、天気は良く、山行自体には期待ができそうでした。

7時50分に御座石鉱泉を出発。石原さんとは初めてなので、ゆっくりしたペースで登りました。ほぼコースタイム通りで鳳凰小屋に到着しましたが、ここまでは全く雪もありませんでした。久しぶりに初冬のキャンプとなりましたが、石原さんのメスナーテントは超快適で、夜半から雨が降り出すも全く問題はありませんでした。

23日 鳳凰小屋↓地藏岳↓観音岳↓薬師岳↓青木鉱泉

前夜からの雨は出発時にはほぼ止んだものの、まだガスっている状態。出発してしばらくすると新雪が積もっていましたが、キックステップで高度を稼いでいきました。このころから天気も急激によくなり、稜線ではガスの合間から北岳も見え始めました。ここで石原さんは北岳が完全に見えるのを待つということでしたが、薬師まで縦走しながら天気のさらなる回復を期待しましょうとお願ひし、縦走を開始。結果として天候はどんどん回復し、薬師に着く

ころには快晴となりました。

青木鉱泉までの下りは結構長かったが、稜線で最高の展望を楽しめたことから頑張りまりました。御座石鉱泉に置いていた車も回収して、無事、山行を終えました。  
(1987年人間科学部卒)

## 妙高あきらめ火打山へ

出雲路 敬孝

【期間】 8月27日～29日

【メンバー】 横尾秀次郎、石原敏雄、出雲路敬孝

2020年の白馬集会は新型コロナ蔓延のため中止となったが、有志が8月29日に対岳館に集まるというので、近くの山に登ってから対岳館に行こうと、妙高火打山行を企画した。が、残念ながら黒沢池ヒュッテが休業していたため、妙高山は割愛せざるを得なかった。

27日 石原氏の車で東京を出発。中央道、長野道経由で麓の笹ヶ峰・明星荘に午後2時すぎ、到着。近くの森やキャンプ場、乙見湖などを散策した。

28日 5時55分、明星荘出発。天候は曇り、晴れ間も。しばらく緩傾斜の森を歩き、7時ごろ、黒沢橋を過ぎると、つづら折りの急登に。9時8分、富士見平で妙高

への道と分かれ、なお登ると、黒沢岳を捲く傾斜のない道になり、この日の宿、高谷池ヒュッテが木の間隠れに見えた。10時10分、ヒュッテ着。宿泊手続きを済ませ、軽装で11時に再出発。

1時間で雷鳥平、13時すぎ火打山頂到着。広い、草と灌木の山頂で、標高は2、462m。隣の妙高山(2、454m)よりわずかに高い。30分ほど山頂にいたが、妙高方面は霧が濃く、外輪山が見えたのがやっとであった。花や湿地の写真を取りながら下り、15時25分、ヒュッテ帰着。夕食まで周辺の高谷池、天狗の庭などを散策した。

春の花や秋の紅葉が綺麗なのだろうと思わせる山。ヒュッテのコロナ対策はきちんとしており、事前予約者のみ宿泊可で、食事の席は間隔を取り、寝床もビニールシートで仕切られていた。

29日 6時5分、ヒュッテ出発。黒沢池ヒュッテ7時7分。荷物を置き、大倉乗越まで往復。妙高が間近に見えるのを期待したが、霧が濃く全くだめで、妙高側200m弱下の長助池辺りも人声が聞こえるのみ。黒沢池ヒュッテに戻り、休憩後、8時30分出発。黒沢池の湿原や池を越えて、前日の高谷池への分岐点、富士見平を9時半ごろ

通過。12時すぎ、笹ヶ峰登山口着。苗名湯に寄って汚れを落とし、長野道、国道19号などを経由して15時すぎ、対岳館に到着した。(1967年工学部卒)

### 三伏峠から塩見、悪沢岳

科野 昌蔵

学生時代も含めて南アルプスとは縁がなかった。定年後、仕事で愛知県奥の山々に住むようになり、日帰りで行ける山々から臨まれる南アを見につけ、夏の縦走をしたいという気持ちが高まった。

2020年の夏はコロナ禍で南アの山小屋はすべて営業停止。畑雑ダムからのバスも運行停止となっていた。そこで西側から入山できて登山口高度の高い越路ゲートから三伏峠に入ることにした。幸い、石原さんが同行していただけることになり、塩見岳と悪沢岳を回る計画にした。

【メンバー】石原敏雄、科野

8月9日 曇 車止め(6:53)

越路ゲート(7:25)―登山口(8:30)―三伏峠小屋テント場(12:15)

曇り空のもと、登山口からのんびりと三伏峠小屋に到着。小屋周辺はひっそりとしていて、テントは4張りくらい。

10日 曇り一時晴 テント場(5:04)―塩見岳西峰(10:01)―テント場(14:51)

少し明るくなってから出発。天気は良いが、塩見岳はガスの中。塩見小屋辺りからガスも晴れ、山頂からは360度の眺望。景色を堪能して天場に戻る。帰路途中から曇り。天場の水場は地図表示よりは遠く、これも小屋の営業停止の影響か。

11日 晴→曇一時雨 テント場(5:50)―小河内岳(9:02)―高山裏小屋(13:03)

テント場からすぐのところは高山植物の保護区域があり、可憐な花々が楽しめる。高山裏小屋に着いてから一時雨。避難小屋を2人で独占。

12日 曇→晴→曇 高山裏小屋(4:00)―悪沢岳(8:35)―高山裏小屋(12:55)―小河内小屋(17:42)

悪沢岳は科野一人でアタック。荒川三山の西岳、中岳は東面の浸食崩壊が深刻に進んでいるように見受けられた。山頂は快晴。みんな見える。あとは急いで避難小屋に戻り、最終日の行程を短くすべく小河内小屋へ向けて出発。途中、雲行きが怪しくなったが、降られずに小屋到着。前日すれ違った3人パーティー(小屋関係者)と同泊となった。

13日 晴→曇 小河内小屋(7:15)

25)―三伏峠小屋テント場(9:55)―登山口(12:27)―越路ゲート(13:17)―車止め(13:58)

朝から晴れで、朝焼けがきれいだった。三伏峠近くのお花畑を楽しみながら下山。やがて曇り出し、最後の林道途中でわか雨になる。

終日の晴天は1日もなかったものの、要所で晴れ。降ってもほぼ濡れることなく、天候ではラッキーな山行だった。例年とは比較できないが、小屋、バスとも営業停止の割には入山者が多いと感じた。(1982年人間科学部卒)

### 仙丈ヶ岳地蔵尾根

石原 敏雄

【期間】2021年4月24日～25日

【メンバー】石原敏雄、科野昌蔵、山崎優太

24日 柏木登山口(6:53)―松峰小屋分岐点(11:25)―地蔵岳越えの2、330mテント地(14:00)

往復約28km、高度差1、900mの長い尾根にふさわしく、伊那からのアプローチ中には、はるか彼方に仙丈ヶ岳が見えた。駐車場からは里山の雰囲気漂う山道を登り始める。体が温まったところに「孝行猿のお墓」に着き、上着を脱ぐ。林道が脇に現

れて並走したり、交差したりする。残雪もない、傾斜の緩い夏道を黙々と登る。松峰小屋の分岐点で水場まで降りて、水筒に水を汲み足す。果てしなく続くのではと錯覚に陥りかけた乾いた山道は、少し登ると傾斜も急になり、氷結した残雪が残るようになり、アイゼンを付ける。地蔵岳北面の巻き道が終わったあたりの窪みの残雪上にテントを張る。

25日 テント地(4:45)―仙丈ヶ岳(9:17)―テント地(12:42)―松峰小屋(14:22)―柏木登山口(18:10)

最近では珍しい早起き早立ちを指すも、やはり少し寝過ぎす。前日と違い、面白い山稜の登りが続く。2、736メートルク手前の急雪面は古い雪が氷化した上に新雪が乗っており、チェーン・アイゼンの石原は消耗する。続登をあきらめかけるも、長い休憩による体力の回復と、他メンバーの思いやりに助けられて、緩い雪稜を登り切り、全員で登頂。頂上からの展望は南方に偏っているが、富士山から南アルプスまでを楽しんで下山開始。森林限界手前のガラ場でカモシカに遭遇。テント撤収後、下山続行。先行した山崎が松峰小屋の水場から運び上げた水を補給して、長い夏道をたどる。途中の一部の区間で、ほぼ水平の林道を歩

## 対岳館に11人集まる

### 白馬集會中止でも

いたりするも、里山の山道はうんざりするほど単調で長く暑かった。

夏季恒例の白馬集會は新型コロナウイルス禍のため、2020年は会行事としては中止となった。しかし、例年の開催時期に近い8月29日には会場の白馬村・対岳館に個人的に出かけた会員が多く、例年並みの11人が集まり、懇談した。参加者は次のみなさん。

大野義昭会長、兼清喜雄、横尾秀次郎、豊坂昭弘、出雲路敬孝、田中喜樹、山田靖則、石原敏雄、稲垣佳夫、上松一雄、佐野威和雄

## 会員の近況

総会議案への回答はがきから抜粋。その後の変動は未確認。順不同。敬称略

大宅 幸夫(歯76) 自宅から近い生駒山、矢田山あたりを徘徊しています。

豊坂 昭弘(医66) 神戸市北区の病院の院長として12年目。有馬温泉へは車で10分のところ。病院の車で朝夕、送迎してもらっており、これ

が勤務が長く続いている要因と思われる。六甲山は毎日登っているが、上の方へ行く回数が減り減った。一昨年、石原氏と東北の山巡りをして以来、山には「無沙汰状態。ジムに週2、3回通って筋肉の機能低下に抗っている。

吉川 信也(理65) まだ在宅で残務整理に忙殺されています。山行は近くの甲山ぐらいいなってしまう。

高橋 雄二(工62) ワクチン接種が早々と終わって、わが身の高齢の恩恵に気づきました。

野田 憲一郎(経60) 昨年夏、脳出血後遺症で登山はほぼ不可能になりました。坂と不整地がだめ。平地はほぼ普通に歩けます。所属していた山の環境保護団体H.A.T.I.Jが30年の歴史を終えました。内外の登山家と知り合ったのですが。

上松 一雄(工77) 昨夏の白馬集會の折に白馬岳をめざしましたが、足が吊って撤退せざるを得ませんでした。その後、トレーニングに励み、石原さんらと雪山へ3回行き、満足しております。今後も頑張りたいと思います。

出雲路 敬孝(工67) 時々、丹沢山系に登っているほかは近隣のウォーキングのみ。コロナワクチン接種は2回目を済ませました。

兼清 喜雄(工60) 相変わらず元気で、ほとんど毎週、登山、ハイキングに日帰りで出かけています。ゴルフは1〜5月はお休みで、6月から再開(ワクチン接種完了で)。

前沢 祐一(工62) 非常に不活発な1年間でした。ワクチン2回接種済みなので、そろそろ山に出かけたいです。

吉田 眞三(医80) 昨年4月より週1回の外来診療のかたわら、関西学院大学言語コミュニケーション文化研究所で院生として言語学の勉強をしております。

大西 啓之(人87) 昨年初冬から山行を再開し、甲斐駒、常念にも行きましたが、再度、九州に単身赴任となり、しばらくはアルプスに行けそうにありません。九州の山に登っておこうと思います。

野口 明(基83) 冬に登った氷瀑(南アルプス大武川一の沢)で肩を痛め、最近はあるような山行ができません。もっぱら槍や穂高などの一般ルートのハイキングかイワナ釣りに興じています。

石浜 高明(工66) 奈良県の低山をウロウロしております。そのほかは卓球とテニスです。

岡部 祐二(工79) 腰椎にいろいろトラブルを抱え、手術せざるを得ない状況になりました。症状が改善

すれば、また岩登りなどを始めたいと思っております。

**山本 彰三**(法63) 年相応に元気にしていますが、山登りは足がしびれているので、あきらめました。ゴルフは90を切ろうと頑張っています。コロナが収束したらタイのチェンマイには行くこうと思いつながら今年も終わりがすが、元気でいたいものです。

**岩永 剛**(医55) 最近はず平地を歩くのがやっとです。それでも山の写真を見ると興奮しますし、現役で働いていたころは山での経験(70年前の話)が大いに役立ちました。皆様方のご活躍を祈念いたします。

**高田 邦雄**(経65) コロナ禍に加え、数年前からの脚のふらつきがひどくなる一方。歩かなければと、両手に登山用ストックを持ち、頑張っていますが、1日3千〜4千歩がやっとです。

**畑中 薫**(医69) 週4日は入院患者の精神科診察に通っています。日曜日のキリスト教礼拝は(コロナ禍のため)オンラインで参加しています。火曜日の太極拳教室はコロナで休みでしたが、7月から再開で楽しみにです。

**松浦 壽彦**(工75) この欄で山登りの報告ができるよう心がけていたのですが、今回もできず、恥ずかし

い限りです。家に帰る時はひとつ前の駅で電車を降りるなど1日8千歩は歩くようにして体の維持に努めています。

**井上 太一**(理73) 伊豆大島に旅行し、6月18日、三原山に登りました。溶岩台地を往復し、お鉢巡りもしましたが、3時間行程で出会ったのは若いアベック1組だけ。9月に久しぶりに奥穂高に登る計画です。来年初には3度目のサンチャゴ巡礼をするつもりで、今度はフランスの巡礼道歩く予定です。

**畑 秀信**(人84) 遠出はできませんが、トレーニングは欠かさず、週末は日帰りの山行に出かけています。また、この機会に山の本や記録を読むようにしています。

**明神 知**(基78) 先月、旭岳温泉の帰りに46年ぶりに天人峡を訪ねました。75年は十勝からの夏山縦走とクワウンナイ川遡行でした。当時は路線バスもあつて、にぎやかな観光地。現在は廃墟となり、ホテル1軒が細々と営業しています。羽衣の滝は立派でした。定年まであと2年。さらに特任で2年ほどいるかも知れませんが、山歩きは続けていきます。

**二本 節夫**(工54) 今年90歳です。一人暮らしですので、介護対象者と認定され、いろいろなサービスを受けています。車の運転をやめました

ので外出が不便で、タクシーと地域のコミュニケーションバスを利用しています。バスの運賃は1回100円、基会にも参加しています。

**中岡 和哉**(医71) 近く夫婦で対岳館に行く予定です。八方池、梅池散歩をもくろんでいます。

**小松 二郎**(工82) 単身赴任しています。コロナ下、健康維持のため毎日1万歩をめざして歩いていきます。

**奥山 宏臣**(医84) 昨年4月より現役山岳部の顧問(山岳部長)をしておりますが、コロナウイルスのため部活動はほとんどできませんでした。今年度から少しずつ再開できればと思います。ご支援よろしくお願ひします。

**四方 大中**(法58) なんとか過ごしておりますが、山岳会の諸行事に参加するのは、ちょっと無理なようです。

**広瀬 貞雄**(工61) 体調は良好です。コロナワクチンは2回、接種しました。6月10日に1回目、7月1日に2回目。自宅近くのかかりつけ医のお世話になりました。2回目は最初、接種した部分が腫れていましたが、2〜3日で消失しました。出歩くことは控えています。必要外出は注意を守りながら心がけています。

## 追悼

**大島 輝夫氏**

3月17日、多臓器不全のため死去、94歳。1949年

理学部卒。旧制神戸一中(現在の神戸高校) 在学中から登山を始め、理

学部時代に徳永篤司氏と冬の遠見小屋で出会ったのが縁で49年

4月、2人で雨

飾山南尾根初登攀を記録。6月に大

阪大学山岳会を立ち上げ、篠田軍治

氏が初代会長に就任した。

日本山岳会(JAC)でも評議員

を長く務めた。個人的には数年前ま

で「化学品安全管理研究所」を主宰。

化学品輸出入の認証手続きや国際協

力機構(JICA)による途上国での

の化学品安全管理制度設計の指導に

取り組んだ。自宅は横浜市青葉区。



## 山岳会創設した大先輩

会長 **大野 義照**

大阪大学山岳会は1949年1月5日、大島輝夫さんが遠見尾根で偶然、徳永篤司さんに出会ったのをきっかけに創立された。旧制浪速高校OBとして鹿島槍北壁を登攀したばかりの徳永さんが、帰路の遠見尾根

で神戸高校OBとして京大山岳部の合宿に参加していた大島さんに出会い、初対面ではあったが同じ阪大生だということを知って山岳会設立を呼びかけたのが始まりだ。

創立総会は同年6月、道場・百丈河原で開催された。参加者は篠田軍治先生（初代会長）ほか12名。その前の4月には雨飾山東南稜の登攀が大島さんと徳永さんによって行われている。これが阪大山岳部の初山行と言つてよいだろう。大島さんはその夏には剣沢合宿、秋には剣岳、そして冬に白馬岳主稜厳冬期初登攀に成功している。49年に理学部を卒業されたが、51年まで現役の山行に参加されるなど現役のことに気を配っておられた。

2000年代になると山岳部の入部者が減ってきた。日本山岳会会員であり、関東の大学山岳部の情報にも詳しい大島さんから関東の大学の情報を寄せていただき、部員が減少すれば各大学が協力して行動すべきとのアドバイスもいただいた。日本山岳会関西支部の中に学生部を設けることも提案いただいた。また、戦前に発足し、各大学山岳部が協力して海外遠征を行ない、60年代まで活動が続いていた関西学生山岳連盟の復活を望まれていた。

残念ながら、いずれも実現できな

かったが、親身になって心配していただいたことに御礼を申し上げたい。この部員減少の問題は、関東の大学山岳部紹介の中にあつたボルダリングウォールの設置によって解決したが、ボルダリングを目的に入室した部員の中に「山へ行きたい」と言い出す者がもう少しおればよいと願つている。

先に少し触れたが、日本山岳会会員として86歳になつても科学委員会と図書管理委員会の仕事を続けておられた。科学委員会では一般を対象にした100人以上が集まるセミナーを毎年開催されていた。

2001年8月末に白馬村の対岳館で開いた白馬集會では、対岳館の敷地内に設置した「大阪大学山岳会創立50周年記念碑」の除幕式を行い、大島さんに碑文を朗読していただいた。また、2014年の集會では米寿の祝賀会を開催、山岳会設立の経緯や白馬岳主稜厳冬期登攀のお話をされた。17年に参加されたのが最後になつたが、対岳館は旧制高校時代から活動のベースとしておられたところで、集會に参加された時はしばらく滞在された。集會の翌朝、雲のかかる前に後立山の山々を見ようとジャンプ台の方へ向かうと、白馬岳や五竜岳方面を眺めておられる大島さんの姿がいつもあつた。

## 山岳書収集にも熱意

野田 憲一郎

毎年末に開かれる日本山岳会の年次晩餐会。関東地区在住の阪大山岳会員で日本山岳会の会員は大島さんと宮本貞雄さんと私の3人だったので、会の終わつたあと、ロビーでコーヒを飲みながら四方山話をするのが常だった。

この会では会員の持ち寄つた図書の交換会があつたが、大島さんは毎年、洋書を中心に購入しておられた。ご遺族の話では、父上の堅三氏の残されたものを含め山岳書を集めておられたようで、1万部ほどを残されたとのこと。中には稀覯本（きこうほん）もあるとみられ、日本山岳会の図書委員会で見せていただく予定になつている。

2016年3月に日本山岳会神奈川支部が発足した時は設立総会やその後の集會にも出席されていた。山のことにはいつも熱心な方だった。また、80歳過ぎまで輸出化学製品の安全性認証手続きの指導などを仕事にしておられたとのことだった。

阪大山岳会も創立75周年を迎えるが、創立時の先輩の山への熱意を受け継ぎ、後進に引き継いでいかねばならない。

元氏 昨年12月22日、心不全のため死去、88歳。1957年医学部卒。旧第一外科在籍後、のちに兵庫県川西市で宍戸医院を開院し、地域医療に貢献した。



山岳部では1954年度のリーダーで、55年春山では黒部川下廊下横断

結果は鳴沢岳から黒部川までに終わったが、後立山から春の黒部川横断という長年の山岳部の願望の先駆けとなった。1956年春山ではアタック隊リーダーとして下廊下横断（内蔵助谷）別山乗越（弥陀ヶ原）を成功させた。

## 編集後記

新型コロナウイルスが登山活動

だけでなく、あらゆるものに悪影響を与えています。この会報も一時は休刊が検討されましたが、事務局はじめ熱心な会員のみなさんの勧めで、いつも通り刊行に踏み切りました。コロナ禍が収まり、みなさんが安心して山に登れる日が早く戻ってくるよう祈っています。

（会報担当・高田邦雄）